
眠れぬ夜の夜想曲

水色の風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れぬ夜の夜想曲

【著者名】

Z4623C

【作者名】

水色の風

【あらすじ】

つまらない日常を繰り返す少女はつまらない日常を生きる少年に出会った。正しいか間違っているかの判断を待たずに誰もが一歩ずつ、その足で歩いていく。眠れない夜が、僕らにとつて優しい夜であるよ。

第一片『光とこのものとか』『その一

そういう意味では私もまた大多数の孤独、なのだろうか。

いかにも高校生的な表現だ。笑えてくる。まあ年相応つてか。

今日もつまらない日が始まる。繰り返しを繰り返すための日々。

私、鈴鳴玲は日々を消費するいかにも現代的な高校生だ。

灰色な毎日を、灰色なら灰色なりにできるだけ煌びやかに飾り立てる。

そして過ぎる。そう、ただ過ぎるのだ。

そこに疑問なんてない。だつてみんなそうに違いないし、それが子ども時代を終え、

今まさに色々なことを知り、知つたが故の絶望に感覚が殺されいく只中にある私達十代のあるべき姿だと思うから。

そしてつまらない大人になつてもつとつまらない日々を消費する。それが日本という飽和した社会の中を生きる人間に敷かれたレールなのだ。

なんちつてな。くだらない。出来るなら抵抗したい。出来るなら。せめてもの抗いで制服を校則違反のカタチに変形させる。

禁止されてるアクセサリーを付けて学校に行く。時々髪を染める。みんなと同じように。それは全くといっていい程効果を為さない抵抗だ。

だが、そうでもしないと人生なんてやつてられない。気が狂いそうになる。

「おい、鈴鳴、昼休み職員室に来い」
腹が立つほど清々しい朝。

私は登校するや否や校門の前に立つてゐる生徒指導に怒声を浴びせられる。

奴の名前は谷原、体育教師、絵に描いた生徒指導。

たぶん朝礼を無視して普通の生徒が校門をくぐる常識的な時刻を30分ほど経過してから

私が校門をくぐったことと、左手にブレスレットをつけていたことにケチをつけるつもりだ。

はいはい、分かりました、と適当に返事をして早足で校門をくぐる。後ろからまだ非難し足りないかのように谷原の叫び声が聞こえるが、そんなものは無視してさくさく進む。

だいたい400メートル四方の校庭を横断だか縦断だかして玄関に入る。

校舎内に入った瞬間、広いコンクリート建造物内独特のひんやりとした空気が

心地よく広がっているのを感じる。

1年1組の下駄箱が玄関の左端にあって、右へ行くと順に組と学年が大きくなる。

3年5組の下駄箱が右端。私は何も考えずに、当然の如く2年4組の下駄箱に進み、

若さ溢れるかわいい柄の封筒なんかが入った某男子の下駄箱とか、これまた若さ溢れる果たし状なんかが入った某女子の下駄箱とかを過ぎる。

『14番 鈴鳴』と活字の簡単な札が掲げてある下駄箱を開ける。ローファーをしまい、上履きを取り出す。別段変わったことはない。男子からの恋文とかいうロマンティックなものも、上履きに画鋲なんていうエキセントリックなものも一切入つていない。当たり前だけど。

ここまではいつも通り、つまらない灰色の日常だった。

「おー、おはよう鈴鳴さん」

ベースケースを背負った男子に突然声を掛けられる。まさか、誰かに声を掛けられるとは思っていなかつた。

だって30分遅刻だよ？普通の奴は真面目に来るが、1時間目サボ

るか、昼過ぎから来るか、

一日サボるか、病院とか訳ありで3時間田に来るかだよ？

この常識外時間登校（自分のことは棚に上げておく）の男は、

高橋文由、同じクラスだ。

制服のカッターシャツはだらしなくズボンから出でていて、少し長めの髪はボサボサ、

眠たそうな眼は彼が目覚めてからもほど時間が経っていないことを雄弁に物語っている。

「お、おはよう。寝坊でもしたの？ 谷原に何か言われたでしょ」

私は、思いがけず人に会つてしまつたことに戸惑いながら（クラスにいる時用の表情ではなく、まだぼーっとした顔のままだつた）、当たり障りのない言葉を探して高橋に話す。

「うん寝坊。谷原には呼び出し喰らつたよ。鈴鳴さんはどうたの？」

髪のセット？」

なぜか当たり障りのある言葉で返される私。上履きを取り出す高橋。「え、いつから私は髪のセットに時間かけるキャラにされてるの」ちなみに私の今の髪型は肩にかかるくらい黒髪ストレート、まあ当たり障りのない髪型。

そんなに手の込んだ髪型には見えない筈なのだが。

言いながら、高橋が上履きを履いたのを確認して歩き始める。高橋も歩く。

玄関より中に入つて左右に廊下が伸びている。その廊下を左に進む。

「や、髪のセットだつたら面白いなと思つただけだよ」

と高橋は笑いながら言つ。廊下に足音がふたつ。右側にある階段を昇る。

この時間なら朝礼は終わつている。教室に入つて担任に咎められる心配はない。

「……ただ、なんとなく朝礼に出たくないだけだよ。最近」
不覚にも男子に、しかもあまり仲がいい訳ではない彼に本音を喋つてしまつた。

顔はいつも学校での私を演じながらも、心の中は憔悴しきっていた。

学校という場では当たり障りなくしていることが求められるのだ。本音よりも建前。建前より常識。そうやって集団の中に溶け込むことで日々をやり過ごす。

制服の変形もアクセサリーの装着も、私の場合、個性を主張したいからするのではない。

つまらない日常へのささやかな抵抗、そしてそれはあくまで大多数が行いうることをしなければならない。生徒指導に呼び出されるのもあくまで常識の範囲内でなければならない。

つまり、本当は反抗なんて立派なものではないのだ。

この葛藤と矛盾に満ちた世界をなんとかやり過ごす為の姑息な手段でしかない。

分かってる。でもどうしようもない。だから、私の基本行動原則は以上の通り。

そして、今この瞬間、なぜか分からぬが、その原則から逸れた発言をしてしまった。

そんな私の心中を察しているのかいのか、高橋は飄々と、当たり前のよう言つた。

「それも立派な理由だな。髪のセットや寝坊と何ら変わりない」あれ、髪のセットと寝坊は30分遅刻の立派な理由なのか。否。彼が言いたいのはきっとそういう事じやない。

朝礼に出たくないという私の意味不明であらう発言を認めてくれたのではないだろうか。

……なんて、人の発言を最大限に都合よく解釈するとは、今日は調子が悪い。

階段を昇り、2階に着いた。

「やー、いつも澄ましてる鈴鳴さんでもそういうことってあるんだなー。なんかほつとする」

教室のドアの数歩手前、高橋はもみじまんじゅうにカスターで入つてゐるものを見つけた時くらいの、何氣ない抑揚、何氣ない表情でそう言った。

「ペ、別に……いつも澄ましてるつもりなんかないよ……」

私の焦りは高校生活始まって以来のピークを迎えていた。

「そつかそつか、それならなおよい」

とかよく分からぬことを言つて高橋は教室のドアを開けた。ガラガラと乾いた音を立てて教室のドアが開いた。

1時間目、公民の授業中にした高橋についての考察を少々。私が集団に溶け込むことによって毎日をやり過ごす人間だとすれば、高橋はどうやら確固たる自分というものを持つていて、そのためになら多少集団から浮いても構わないと思つてゐる類の人間なのだろう。

毎日をやり過ごすのではなく立ち向かっているくらいの勢いがある。高橋はバンドでベースを弾いているが、言われてみれば高橋のバンドはみんな浮いてる人間が集まっている気がする。

よつて高橋は決して友達が多いわけではないし、決してクラスとか学校とかの最大勢力云々に媚びたり寄つてきたりもしない。

ただ、高橋のすごいところは、

それでもどこか一目置かれていたり、一部からは信頼すらされてゐるのである。

例えば、高橋のバンドでボーカルをやつてゐる中村は、中学の頃父親が騙されたとかで家庭が崩壊しかけ、

今でも苦しい生活を送つてゐるという噂がある。

それ故に中村は一時期荒れた。警察の世話になつたとかならないとか。

詳しいことは分からぬが、中学3年の時に高橋とバンドを組んで

から中村は変わった。

非行をやめ勉強をして高橋と同じ高校を受けて合格した。

今でも人を滅多に信用しようとする中村だが、

高橋及びバンドのメンバーといふ時は私達が友達といふ時の何倍も
楽しそうに笑うのだ。

中学時代の中村を知る私の友人はそれを高橋のお陰だと言つた。
そういう逸話があるのも高橋が一目置かれている一因であろう。
なんだかんだ言って女子にも多少人気がある気がする。多少。
ただ彼は鈍いのか興味がないのかマイペースなのか或いはその全で
か、

あまりその類の噂は聞かないし、頑張つて格好つけたりもしない。
却つてそれが一部女の子の気を惹いていたりもするんだろうな。
ここまで考えて私は少し悔しくなつた。或いは羨望か。

私は必死に集団に溶け込もうとしていて、実際そうできているとは
思う。

でも、溶け込んでしまえばそれ以上も以下もない。

そこから得ることも失うこともない気がする。

そしてそのフラットな状態を維持するために努力するのだ。

高橋はどうだらう。

確かに、集団からは浮いていて、敵も少くはないのだ、と思う。
でも彼はそれ以上に毎日生きていて何かを得ている気がする。
全員が両手放しで認めるわけじゃない代わりに、認めている人は心
の底から彼を認めている。

信頼、と呼ばれるものとはこういうものなのだろうか。
ちくしょう。

心の中で波浪注意報が出たのでそれ以上考えるのをやめた。

第一片『光とこのものとか』その二

昼休み。中村が学校を休んでいたので（サボりだらうが）、つまらなさそうな

高橋がふらつと教室から姿を消した。

教室では各仲良しグループが集まって昼食を食べるのだが。きっと他のクラスにいるバンドのメンバーと同じ飯を食べるんだろうな。

悠長なことを考えていたら、教室のドアが勢いよく開いた。

私が自分の過失に気づいた頃には時既に遅く、

教室内にはキングオブ生徒指導・谷原の声がぴりぴりと響き渡るの

だった。

「くおおら、鈴鳴！！高橋！！職員室に来いつて言つただらうがあ

！」

……やつてしまつた。完全に忘れてた。奴のことはアンドロメダ星雲のもつと彼方、

忘却の星へと消し去つてしまつていた。騒然となる教室。

……逃げたのか、高橋。ちくしょう。

「つおおおおい、高橋はどうした……出てここ……！」

……谷原、目が血走つてゐるよ。

親切な生徒がびくびくしながら言つた。

「あ、あの、谷原先生、」

「なんじゃい……」

一瞬、その生徒が縮こまつた。罪のない生徒を威圧するな、体育教師。

「……高橋君は、あの、どこかに行きました」

「おい、お前ら、高橋の居場所は知らんのか」

首を横に振るクラス一同。血に飢えた生徒指導の田は私に向けられる。

「まあいい、鈴鳴！…まあお前だ！…ちょっと来い…！」

半ば引き摺られるように職員室に連れて行かれる私。クラスに田をやる。

みんなは呆然として見ている。

まるで大自然の摂理の犠牲になつた草食動物を見るような田で。

分かつてはいるのだが、私が溶け込もうと必死になつてゐる集団はこういう時頗る無力だ。

まあ、当然。私は咎められるべきことをしたから咎められる。

：確かにそうなんだけど、理屈は分かるんだけど…なんだか寂しくなつた。

こういう時、高橋のバンドのメンバーはどうするだろうか。

そういうや、中村が煙草吸つてるのがバレて親を呼ばれそうになつた時、

高橋が底つて結局中村が説教食らうだけで済んだことがあつたつける時、

高橋も巻き添えで説教を食らうことになつたが、あの二人は

「んじゃ、ちょっとお勤めに言ひつてくれる」

とか言つて笑つてたつけ。羨ましいな、そういうの。

あれ、私はそういう反抗のパフォーマンスはもつと計画的にやつて、親が呼ばれない程度に抑えるべきだとか思つてなかつたつけ。当時も、今も。

やつぱり今日は調子が悪い。きっとそうだ。

そう、心の中で波浪注意報が出てるだけなのだ。

と、谷原の説教とは全くもつて関係ないことを考えていて、

奴の話はほとんど聞き流していただけれど、兎に角、30分に及ぶ説教が終わつた。

「あーあ、今日は友達と購買でパン買つて食べる予定だつたのにな

ドアを開け、ひとりごちながら職員室から出た。

もつほとんどのパンが残つていらない購買でバターロールとミルクティーを買って

ふらふらと廊下を歩いた。

廊下はただ真っ直ぐ伸びている。

他の生徒がこの時間にまだパンを持つている私を怪訝そうな目で見る。

歩く。何も考えないようにして歩く。

ふと、屋上へと続く階段が目に入る。

3階建ての校舎のこの階段だけが屋上に通じている。

私が何も考えないようにしているのを戒めるように、階段はそこにある。

まるで一段一段が思考のプロセスを象徴しているようで、それが妙に私の焦燥を刺激した。

今日は波浪注意報の日なのに。

いや、今日は波浪注意報の日だからこそ、か。

こういう感情的な話を抜きにすると、この階段の出現は都合がよかつた。

今さら教室に戻つて一人でパンを食べるには厭だつた。

この時間なら屋上で食事をしている生徒も教室に戻つていて、誰もいないはず。

一人でパンを食べるには屋上は絶好の場所だった。

こうして、私はその思考のプロセスを登り始めた。

私は考える。

この世界について。

私は考える。

他人について。

私は考える。

私自身について。

……何ひとつとして答えは出ない。

答えが出ないから考えを放棄する、なんて話は、ゴマンとある。

だって、そんなこと考えるよりテレビ見てた方が楽しいじゃん。

ネットやってる方が楽しいじゃん。買い物行く方が楽しいじゃん。

廊下はただ真っ直ぐ伸びている。

他の生徒がこの時間にまだパンを持つている私を怪訝そうな目で見る。

でも、みんなきっと、心のどこかで答える出ない問いを繰り返しているのだ。

この世界には安易な逃げ道がたくさん用意されている。
逃げるから、きちんとと考えてあげないから、心が悲鳴を上げている
んじゃないのか。

そう思った。今までの私なら逃げていただろう。現にさつきまで逃げていた。
でもなぜか、この階段はそれを許してくれなかつた。そんな口もある。

まあ、波浪注意報だし。

ここまで考えて私は階段を昇りきつた。田の前には屋上に出る少し
檻褛い扉がある。

ドアノブに手を掛け、開ける。

一気に眩い光と蒸し暑い空気が私を包んだ。屋上。
学校の中で、空に一番近い、場所。

外には冷房も扇風機もないけど、私は基本的に外の空気は好きだ。
特に、周りに見知った人のいない外が好きだ。

自由を、私は独占している。そんな気になつたりもする。

私はその自由を全身に受け止めるよう大きく伸びをする。

不意に、その独占は思い違いであつたことを知る。先客がいたのだ。
私の後方、つまり、私が出てきた扉のある建造物、何て言つたらいいのだろう、

屋上の屋上とも言えるその場所に、彼は居た。

私より空に近い場所で、高橋はヘッドフォンで音楽を聴いていた。
私が気づいたのを見て、ヘッドフォンを取り外し、片手を擧げる。

「おー、鈴鳴さんもサボり？」

え……5時間目サボるつもりなんだ。

「私は昼ごはんを食べに来ただけ、谷原に説教食らつて、こんな時
間になつて

今から教室で食べるの気まずいじゃない」

「はつはつは、『苦勞様』

高橋は腹の底から笑っていた。高橋だって説教の対象だつたくせに。「や、笑いすぎた、『めん』『めん』。だつてこんな天氣いい日に説教なんてさー」

私が不愉快そうに睨んでるのを見て高橋は軽く謝った。……軽く。そして続ける。

「鈴鳴さんも登つてきなよ、ここ景色いいんだ。今日は絶好のサボリ日和だし」

「たまたま食事に来た女子を巻き添えにするのか、高橋君は『……やばい、小説なら地の文或いは（）の中に書くべき内容が口をついて出た……』。

「……まあ、別にいいけど。次の授業復習しかしないし」

そういうつて私はその建造物の側面にある梯子を登る。登つきて、思わず口が開いた。

「……わ、きれい……」

柵がなくて、私の住んでる街とその向いの山を何にも遮られずに一望できて。

今日の空気は澄んでいて、日に照らされた山の縁は、木々一本一本の濃淡が分かるくらいに鮮明に、美しい。

「な？サボリ日和だろ？こんな景色放つて授業に出るとか、勿体無いよ」

確かに、その通りかもしれない。……サボリはよくないくけど、たぶん。

けれど、こんな景色に心を奪われて、毎日の繰り返しを一旦止める、そんな日があつてもいい気がしてきた。

私は、適度に間隔を取つて高橋の隣に座る。少し照れくさい。

「それ、音楽、何聴いてたの？」

何を話していいか分からず、高橋の手にあるヘッドフォンが耳に入つたので、

安直だが、訊いてみることにした。

「えと、KEANEっていうバンド、かな」

「つう……知らない……」

しまった……バンドマン相手に音楽の話題つて、格闘家相手にインドア派が闘いを挑むようなもんだよな、たぶん、きっと。

「ほら、イギリスのバンドだし、知らないとも無理はないと言つか、だから、その……」

すごい勢いであたふたする高橋。気を遣つてくれているだろうか、ちょっとだけ嬉しい。

「ありがと。えと、きーん、だつけ?私にも聴かせて」なんで礼を言われたのか理解できない風に高橋は一瞬怪訝そうな顔を見せて、

「いいよ、はい」

つて笑いながらMP3プレイヤーとヘッドフォンを手渡してくれた。私はヘッドフォンを装着し、プレイヤーのスイッチを押す。ポチつとな。

一瞬、無音の世界が広がつて、その後、インターロが私の耳に入つてくる。

無音の世界を挟んで別の世界が開かれたかのよひ、音楽は私を包んだ。

私は目を閉じて、その世界に身を委ねる。

正直、音楽のことはよく分からない。

けど、目を開けたら広がつていてるであろう景色と同じくらい、その世界は美しかつた。

きれいで、纖細で、クラシックの歌とも、私がいつも聴く歌とも違う、歌声。

こんな風に歌を歌う人がいるなんて初めて知つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4623c/>

眠れぬ夜の夜想曲

2010年10月9日16時01分発行